

抑留記

島根県 槻谷利夫

私は、島根県大原郡木次町において大正八年二月二十日出生。昭和八年三月、木次町立尋常高等小学校卒業。同年四月、鳥取県米子市、加藤電気商会電気工事に就職。同十二年四月、出雲電気株式会社木次変電所へ入社。同十四年十月、徴兵検査の結果、工兵第一補充兵、同社にて銃後の守りに専念する。

昭和十五年五月、広島電気と合併、中国電気株式会社となる。

昭和十七年九月、召集令状により、同年十月、広島西部七部隊独立工兵隊へ入隊。間もなく、十月中旬、中支派遣軍第二六四六部隊第七十師団独立工兵隊派遣のため宇品港出港、下関經由、朝鮮釜山港に上陸。列車にて山海関經由中支杭州着。原隊で現地教育を受け、十八年三月、第一期教育終了。

中隊勤務及び初年兵教育に従事。同年十月、藤第六八九部隊へ転属（上等兵）。十一月、第三次長砂作戦に参加。道路構築及び橋梁構築に参加。作業中、敵機の空襲攻撃に遭遇したが、幸いにも被害無し。二十年五月、突然移動命令により鉄路を行軍、満州四平街に到着。八月に入ると戦友の間でも噂話が飛び交ったが、信じ難き終戦の報に、誤報であることを願った。

昨日まで生命より大切にしていた銃器類を鉄くず同然広場に投げ捨て山積みになされた姿は、筆舌に尽くし難い悲しい思い出であった。九月に入り、我々が投棄集積した武器類をソ連軍が持ち去った。

東京ダモイということで、みんな大喜びで待機していた有蓋貨車に乗り込んだ。有蓋貨車は内部が二段に仕切られた、家畜輸送でもお粗末な貨車に詰め込まれ、数日後黒河に到着した。

十二月ともなると、貨車の屋根は真っ白に霜が降りてまるで冷蔵庫の中同然で、お互いに体を寄せ合って暖をとった。輸送中の生活は、黒パン二百グラム、ジャガイモのふかし若干くらいで、その他何も食べるも

の無しで空腹に耐えた。

こんな日が何日も続き、やがて列車が止まり、下車命令により下車したが、場所の記憶なし。そこには何かのトラックが待機していた。ここでトラックに乗り換え、相当の時間をかけて目的地へ到着したが、夜間のためあたりの様子が何もわからず、朝になってザンダーゼリアースクということが解った。

収容所は板張り上下二段に仕切られ、四、五人ずつ入れるよう区切っており、窓は珍しく二重窓にできていて、中にのこぎりくずが詰めてあった。

最初の半年くらいは自動車整備工場の整備あるいはセルモーターの整備であったが、やがて鉱山の掘り出し作業に就いた。ロシア人が坑道内で発破をかけた採石の運搬作業が主な仕事で、掘り出した鉱石をトロッキに積み込み搬出口へ運ぶ作業で、一番方―三番方の三交代で行う作業であったが、一番方がノルマの達成ができないと達成するまで作業を続行させられ、二番方の就労が二時間くらい遅れることになり、食事も不定期となり、重労働にもかかわらず、ノルマ達成まで

就労させられ、一日二食のことが多かった。食事はそれでも黒パン三百グラム、スープは飯盒半分、ジャガイモのふかし三百グラム、それでもノルマ達成のため空腹を我慢しながら、鉱山の薄暗い穴の中で重労働に耐えた。二十一年の三月頃、広い広い坑道の中で（五メートル四方の場所）作業中突然落盤事故が起こり、四人の戦友がその下敷きとなり命を落とした。その事故でロシア人のカマンジールが交代させられたこともあった。このことがあって、いつ自分の身に降りかかるかもと、一瞬の事故が明日は我が身と身震いがあった。そんな事故が起きた後はロスケの点検も慎重になり、事故もなくなった。

九月二十日、突然「ヤポンスキー東京ダモイ」とのことので所持品をまとめるよう通達があり、胸踊らせて喜んだ。間もなくトラックに分乗して駅に向かう。入ソのときは千二百人と聞いていたが、帰るときは六百人くらいと聞いた。

駅に着き列車に乗り込んだが、まだ半信半疑で、ただ真実を祈った。持ち物の写真、腕時計、万年筆等は

入ソ当時全部取られていたので身軽でナホトカへ着いた。政治的な教育があると聞いていたが、何も無かつた。

二十二年十月二日、待ちに待った迎えの船第一大丸に乗船。十月六日、舞鶴港に上陸。十五日、懐かしの我が家へ帰ることができた。三カ月の休養、体の回復後、七年ぶりに元の職場へ勤務。三十余年勤め、無事退職し、最近は老人会の世話をしたり、ゲートボールで体の健康維持に努めながら、花木の盆栽の育生を手がけて楽しく暮らしている。

我が人生

島根県 佐藤 豊

島根県飯石郡三刀屋町において大正十三年二月出生。昭和十四年、一宮尋常高等小学校卒業。昭和十七年、国民青年学校本科四年在校中舞鶴海軍工廠に徴用。同年七月、現役兵志願、甲種合格。同年十二月十

日、西部第三部隊に入隊。五日後の十五日、移動のため下関港より朝鮮釜山に上陸、列車で山海関經由、中支当陽に到着。藤六八六五部隊に編入、実戦を交えながらの初年兵教育を受けた。修了後、付近の警備と討伐作戦に三年間参加した。

二十年四月、当陽を出発、鉄路を行軍。本土防衛の任に就く予定が、突然の命令により、満州四平街に至り、約二カ月の間、陣地構築、初年兵教育に当たる。八月二十六日、信じ難き終戦を聞き、大隊長命令により、付近の小高い丘の上で天幕生活が始まり、九月十日頃ソ連軍の命により武装解除となる。銃は全部撃針を折って、十丁ずつ束ね、指定の場所へ兵器弾薬も全部山積みした。

夜間になると満人が二十人〜三十人くらいが棒切れや鎌を持って物取りに来たが、二人〜三人と仲間が怪我をすると直ぐに帰って行った。

約二カ月間このような状態が続いた。

十月十八日、待望の東京ダモイということでみんな大喜び。汽車は中を二段に仕切った有蓋車に乗せられ